



Title	Vol.5 No.2
Author(s)	核兵器廃絶研究センター(RECNA)
Citation	RECNAニューズレター, 5(2), pp.1-4; 2016
Issue Date	2016-09-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/36839">http://hdl.handle.net/10069/36839</a>
Right	© 長崎大学核兵器廃絶研究センター

This document is downloaded at: 2019-02-22T11:06:24Z

## ナガサキ・ユース代表団：北東アジア非核兵器地帯

ナガサキ・ユース代表団4期  
白波 宏野

今回のナガサキ・ユース代表団4期の活動は、NPTに参加してきた例年とは異なり、自分たちで一から企画を練り上げるものであり、初めての試みであった。そして、“核兵器廃絶のために私たち若者ができること”をやりたいように出来るのは今年のナガサキ・ユースの最大の魅力である一方で、右も左も分からない、先が見えない大きな試練でもあった。その中で私たちは「NEA-NWFZ(北東アジア非核兵器地帯)」「平和教育」という2つの課題を見出し、この課題に“若者”としての立場から取り組んできた。

私はこの2つの課題のうち、「NEA-NWFZ」にコミットし活動を行った。核兵器廃絶に向けた構想の一つとして挙げられるNEA-NWFZであるが、その前提としてまずアジア、さらには日本、中国、韓国、また北朝鮮間の友好関係、特に市民レベルでの関係を改善していく必要があるのではないかと、また、“一国非核地位”を築いたモンゴルには、NEA-NWFZのヒントがあるのではないかと、そのような思いから、モンゴル、中国、韓国を訪問し、私たち若者にできることを探求しつつ活動を進めた。実際に現地へ赴いての活動が始まると、各国の若者を中心として政府関係者や法人団体の方々とも意見交換する場を設けることが出来、それぞれの国で課題や発見が多くあった。

こうした活動を通して見てきたことは、まず、各国の“若者”は他国に対する認識を政府レベルと市民レベルではっきり区別する傾向が強いこと。これは今回訪問したどの国にも共通していることで、国境を超えた“若者”の特徴であり強みであると言える。インターネットが普及し互いの状況がより多く見える“若者”世代、ポップカルチャーで繋がる“若者”世代、「外に向ける目」にかけられたフィルターがより薄い“若者”世代はメディアや政府による国家間の衝突の中でも、他国のことを人と人の繋がりをもち捉えるまなざしを持っている。核兵器廃絶の大前提として求められる国家間の友好関係、この関係を築くのに“若者”の存在やまなざしは重要な意味を持つと思う。今回の活動ではそのことを実感すると同時にいかにして市民レベル、特に若者同士の友好関係を促進するかが今後の課題のひとつとなった。また、活動の中で見たこととしてもう一つ「モンゴルのユニークさを活かしたアジアの未来」が



モンゴル、ウランバートルでの意見交換に臨むメンバー

撮影：ナガサキ・ユース代表団

挙げられる。モンゴルは、アジアの中で一国非核地位を築いた国として、また中国とロシアという二つの大国に挟まれた国として非常にユニークな面を持つ。また、モンゴルは北朝鮮とも友好関係があり、比較的容易に行き来が可能であるという特徴もある。このようなモンゴルの特性を活かせば、例えば日中韓北だけでは関係を築くのが困難な場合でもモンゴルを通じて繋がる事ができる。モンゴル側もその役割を担うことで国際的地位の向上や国の発展の一助となり有益である。モンゴルのユニークさはアジアの未来をよりよい方向に導く可能性があるのではないかと感じた。

今回の活動では若者が中心となって市民レベルの繋がりを強化していくことの重要性やモンゴルのユニークさとアジアの可能性などの発見があった一方で、若者同士の友好関係をどのように促進するか、モンゴルのユニークさを私たちはどのような形で活かせるか、など課題も多く生まれた。今回の海外渡航で得たものを如何にして次に繋げるか、“若者”としての立場を大切にしながら私たちだからこそできること、私たちにしか出来ないことを続けていこうと思う。

(しらなみ ひろの、長崎大学2年)

## ナガサキ・ユース代表団

## ピースキャラバン

子どもたちのキラキラした瞳と、鳴りやまない拍手。毎日授業や部活を終えて夜10時から集まって、重い頭と喉を抱えながら、夜中まで授業の話し合いを進めた。私たちの怒涛の半年間は、計5府県(長崎、広島、大阪、和歌山、愛知)、約700人の心の中に何を残すことが出来たのだろうか。

そもそものきっかけは昨年開かれたNPT再検討会議だった。核兵器廃絶への道が見えない会議そのものに対する失望感よりも、日本政府と中国政府とのやり取りが印象的であった。「被爆地訪問推奨」の提案があっけなく削除されたとき、被爆国日本としての発言力のなさ、中国との歴史的対立の根深さが浮き彫りになった。このままではいけない、そう思いこの企画「ピースキャラバン」が始まった。国内の若者に対して、核兵器の問題を考える、現在、過去、未来という視点を取り入れ、そして「被害面」として語られる被爆の歴史にとどまらず、「加害面」の歴史についても考える、そんな平和教育を長崎から全国の学校に発信しよう、そんな思いが原動力となった。

まずは自分たちも勉強しなくてはと思い、中国は南京と上海、韓国はソウルに実際に足を運んだ。中国・韓国では大学、研究機関やNGOを訪問し歴史認識をはじめとする日中韓間の様々な問題について意見交換をした。侵略戦争や慰安婦問題などの重いテーマについて話し合いをするときでも、誰一人感情的になる人はいなくて、歴史的な対立を乗り越えるための具体的な案を出し合うことが出来た。自分たちと同じような世代で、このような問題に向き合い、前向きに考えている人たちとの出逢いが、私たちを勇気づけてくれた。

日本に戻り、授業に向けて本格的に始動。原爆被害の実相、核兵器をめぐる国際情勢と日本の立場、原発と核兵器の

関連性、歴史認識問題など、出前授業に盛り込む内容は多岐にわたり、情報量と子どもたちの理解力のバランスを考えることにとっても苦労した。一度考えた大枠を崩して一から考え直す作業もあった。何より、メンバー一人ひとりの伝えたい思いを、どう授業の中に織り込むか、メンバー間での議論も激しかったものの、自分と違う価値観や考えを持つ人を受け入れ、対話する姿勢は一つの平和教育のかたちだったと今になって気がついたこともある。最終的に授業は2時間程度のプログラムでインプットは30分、その他を質疑応答、ディスカッションや共有のアウトプットにあてる構成で合意した。子どもたちの多様性を最大限に引き出し、ものの見方や考え方を提案する私たちらしい授業をすることになった。対象者は高校生としぼったものの、多様な変数(公私立、部活動、クラス、学年全体、被爆地内外)を考慮し授業をその都度オーダーメイドすることは想像以上に大変であった。

いざ授業に行く日も、開始直前まで改善が続いた。授業が始まると、みんな堂々と、そして本当に楽しそうに子どもたちに語りかけていた。それに応えるように、たくさん質問や意見を出してくれた子どもたち。授業後のアンケートでは約9割の子どもたちが「わかりやすかった!」「楽しかった!」と答えてくれたことが印象的であった。

正直、私たちの授業が子どもたちの心にどれだけの影響を与えたのかはわからない。それでも、この小さな種がいつか彼らが社会に出ていくとき、少しでも役に立つと信じている。

(いながき あゆみ、長崎大学3年)

## 国連公開作業部会

## これからの日本の課題

中村 桂子

8月19日、ジュネーブの国連欧州本部で開かれていた国連公開作業部会(OEWG)は、核兵器禁止条約の交渉会議の2017年開催を国連総会に勧告した報告書を賛成多数で採択し、閉幕した。非核兵器国主導で核軍縮の新しい潮流を生みだし、核兵器の禁止と廃絶を訴えてきた「人道アプローチ」の主導国と市民社会にとって、間違いなく歴史的成果と言えるものであった。しかし同時に、OEWGの一連の議論を通じては、核保有国と非核保有国、「核の傘」依存国とその他の非核保有国、「核の傘」依存国同士といったさまざまな組み合わせにおいて、国家間の亀裂があらためて浮き彫りとなった。

議論の経過の詳細な分析は別の機会に譲るとし、ここでは、今から数年のスパンをイメージしながら、日本政府が直面する課題について考えてみたい。もちろん交渉会議がどのよう

な形で実現するのか、現時点では不透明な点が多い。しかし、OEWGの結果を踏まえて、秋の国連総会第一委員会で交渉会議の開催が決定する見通しが強いなか、そうした想定の下で、日本政府に何を訴えていくべきかを被爆地の市民が考えておくことは必要であろう。以下のような点が重要であると考えられる。(追記:9月28日、オーストリアやメキシコなどが2017年の交渉会議開催を明記した決議案を国連総会に提出した。)

## ①「橋渡し」は可能である

交渉会議に参加することは当然として、日本政府には、核兵器禁止条約「賛成派」の国々と、それに否定的な核保有国や「核の傘」依存国との「真の橋渡し」としての役割が求められる。そのためには、従前の「ステップ・バイ・ステップ」アプロ

子を主張するにとどまらず、核兵器廃絶に向けた枠組み条約を具体的に提案するなど、これまでよりも踏み込んだ議論を展開していくことが必要である。「禁止先行型」の核兵器禁止条約と、「ステップ・バイ・ステップ」の両方の支持国を巻き込んでいけるような提案は可能であるが、これまで十分に議論が進んでいない領域でもある。スウェーデンやスイスなどの「枠組み合意」提案や、他の分野の条約における既存の枠組み条約もこのような検討の参考になるだろう。

## ②禁止条約は安全を損なわせない

北朝鮮の核実験の動きなどを背景に、核兵器禁止条約「反対派」の国々は、さらなる核抑止力強化の必要性を訴えると同時に、核兵器禁止条約の議論がNPTを中心とする現在の核不拡散体制を損なわせる、という議論を強めてくるだろう。日本国内においては、核兵器禁止条約に向かうことはむしろNPT第6条の核軍縮誓約の履行を促進し、結果的には北朝鮮の核問題の解決を含めた国際安全保障の強化につながる

ものであるという骨太の議論を広めていくことが必要である。日本政府が禁止条約の議論に積極的に参加することは、地域的な信頼醸成の面でもプラスの効果をもたらすと考えるべきであろう。

報告書の抜粋、暫定訳は市民データベース参照。

<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/database/document/no6/oewg20160819>

全文(英語)は下記を参照。

[http://www.unog.ch/80256EDD006B8954/\(httpAssets\)/B7F8C26BC8E15317C1258018003E1D71/\\$file/Final+Report+of+the+OEWG,+as+submitted+to+GA+\(clean\).pdf](http://www.unog.ch/80256EDD006B8954/(httpAssets)/B7F8C26BC8E15317C1258018003E1D71/$file/Final+Report+of+the+OEWG,+as+submitted+to+GA+(clean).pdf)

(なかむら けいこ、RECNA准教授)

## ナガサキ・ユース代表団

## ナガサキ・ユース代表団4期生が決定

前号に続き、第4期ナガサキ・ユース代表団をご紹介します。

### ●秀 総一郎 (長崎大学 多文化社会学部 2年)

私は昨年ニューヨークの国連本部で開かれた、2015年NPT再検討会議にナガサキ・ユース代表団3期生として参加してきました。そこでは本会議の傍聴することはもちろん、国連内で日本の平和教育の現状と課題、そして「新しい平和教育」の提案を発表する機会もありました。発表までに調査計画と分析に相当な時間がかかりましたが、そのおかげで自分でも満足のできる発表ができたと感じています。しかし、世界に対してその発表をするだけではこの世界は何も変わりません。今回は私たちが主体となり去年学んだことに加えて、どのようにしたらこれらの問題を解決できるのか、自らが新しい平和教育の先駆者となり世界の先駆けになりたいと考えています。特に私たちと同じ年代の「若者」を中心に、彼らと同じ目線から、また教育という側面から、核兵器廃絶という大きな目標へともに突き進んでいきたいと考えています。

### ●松本 健太郎(長崎大学 教育学部 3年)

私は、RECNAサポーターとして活動を始めた大学2年生の頃から、核兵器の廃絶や平和な世界のために、自分には何ができるか考えてきました。核なき世界、そして、平和の実現のために大切なことって何だろう？と、これまで私自身が体験してきたことから考えみたときに、「国を越えた、市民レベルのネット

ワークの構築と拡大」という答が私の中に芽生えました。世界中を見渡すと、新たな世界戦争の火種になりかねない大規模な問題が、あちらこちらで起こっています。アジアという地域1つをとっても、諸国間で領土・歴史認識の問題が起こっていて、とても平和を実現できるとは思えません。私はまず、日本人として、最も関係があるアジア諸国の友好関係を構築していけるように、団の1人として貢献していきたいと考えています。

### ●溝越 史恭(長崎大学 教育学部 3年)

核兵器の問題についてももっともっと考えたい。

そう思い、私はこのユース代表団に応募しました。

核兵器の問題に関して、自分から深く考えたことはありませんでしたが、この問題についての安易と思われる言動に、いつもこらえきれない悔しさを感じていました。しかしこの問題について学習し、多くの人の考えを聞き、そして自分自身でも考える中で、ほとんどの人には、そう信じて発言、行動するだけの根拠があるのだということを理解できるようになりました。それを聞かずに相手否定することはできない。話し合うことの重要性を強く感じました。

たくさん経験を通して、互いを尊重した上で、数ある考えや方法の中でも、私はこの問題に関して「核なき世界をめざす」というやり方でアプローチしていきたいという考えに至りました。これから、どんな人、場所、考え方、に出会えるのかと、今とてもワクワクしています。

# RECNAの活動

2016年7月1日～2016年9月30日

- |          |  |                   |   |
|----------|--|-------------------|---|
| 7月1日(金)  | ■第26回RECNA研究会<br>テーマ:「衛星リモートセンシング技術の応用、特に軍縮・不拡散分野への応用の現状について」<br>- 講師: Irmgard Niemeyer博士(ドイツ、ユーリヒ研究所) | 8月5日(金)           | ■中国外交学院「洋上会議『21世紀海のシルクロード』」来訪<br>(広瀬副センター長、中村准教授)   |
| 7月1日(金)  | ■東京にてIISS-CPDNP共催ワークショップに参加<br>(鈴木センター長)   | 8月8日(月)           | ■キム・ウオンス国連事務次長訪問  |
| 7月1日(金)  | ■東京大学にて核軍縮検証国際シンポジウムに参加<br>(鈴木センター長)   | 8月9日(火)           | ■長崎大学医学部原爆犠牲者慰霊祭<br>(講師:鈴木センター長)  |
| 7月1日(金)  | ■長崎市立小島中学校校外学習来訪(広瀬副センター長)   | 8月9日(火)           | ■長崎県立長崎北高校平和講座 (講師:中村准教授)   |
| 7月1日(金)  | ■ナガサキ・ユース代表団4期生報告会   | 8月11日(木)          | ■日本福音ルーテル九州教区平和研修<br>(講師:広瀬副センター長)  |
| 7月5日(火)  | ■核兵器廃絶長崎連絡協議会総会  | 8月13日(土)～8月19日(金) | ■国連公開作業部会モニター<br>(ジュネーブ、中村准教授)  |
| 7月9日(土)  | ■平成28年度核兵器廃絶市民講座<br>第2回「世界の核兵器の現状と近代化計画」<br>- 講師:富塚明 (RECNA兼務教員・准教授)<br>- 場所:アルカスSASEBO 大会議室A          | 8月16日(火)          | ■外務省有識者招へい事業アルカ・アチャーリャ教授(ネルー大学、インド)来訪 (広瀬副センター長)  |
| 7月22日(金) | ■非核の会・長崎講演会 講師 (鈴木センター長)   | 8月21日(日)～8月23日(火) | ■広島ジュニア国際フォーラム (中村准教授)  |
| 7月23日(土) | ■広島国際シンポジウム「危機の東アジア―核なき世界に向けて」<br>- 場所:広島国際会議場<br>- パネリスト:広瀬副センター長                                     | 8月28日(日)～8月29日(月) | ■カザフスタン政府主催「核兵器のない世界を目指して」国際会議出席<br>(アスタナ、カザフスタン、鈴木センター長)   |
| 7月27日(水) | ■長崎さくガイド研修会講師 (中村准教授)  | 9月2日(金)～9月3日(土)   | ■科研費「核廃絶実現にむけての促進・阻害要因の分析と北東アジア安全保障」研究会(伊王島)<br>参加:鈴木センター長、広瀬副センター長、全兼任教授、中村准教授   |
| 7月29日(金) | ■立命館高校平和研修グループ来訪(広瀬副センター長)   | 9月10日(土)          | ■平成28年度核兵器廃絶市民講座<br>第3回「核兵器廃絶へ向けて:非核兵器国の役割」<br>- 講師:中村桂子 (RECNA准教授)<br>- 場所:国立長崎原爆死没者追悼祈念館                                      |
| 7月30日(土) | ■国際シンポジウム「核兵器廃絶への道」<br>- 場所:長崎ブリックホール<br>- パネリスト:黒澤満RECNA顧問、鈴木センター長<br>ナガサキ・ユース代表団:河野早杜、秀総一郎           | 9月13日(火)          | ■北東アジア平和協力構想(NAPSI)広島国際会議<br>(鈴木センター長)  |
| 8月1日(月)  | ■第27回RECNA研究会<br>「英国の核兵器近代化<br>～トライデントシステムの更新問題をめぐって～」<br>- 講師:レベッカ・ジョンソン博士<br>(英アクロニム軍縮外交研究所所長)       | 9月14日(水)          | ■第28回RECNA研究会<br>「長崎のカトリック教界におけるローマ教皇来訪の波紋」<br>- 講師:四條知恵RECNA客員研究員<br>「広島と長崎の戦後史再考―「復興」と「文化」をキーワードとして―」<br>- 講師:桐谷多恵子RECNA客員研究員 |
|          |  | 9月26日(月)～9月29日(木) | ■「Pugwash Security Challenges and Nuclear Weapons in Europe」(ロンドン、鈴木センター長)  |

## お知らせ

### 平成28年度核兵器廃絶市民講座

#### 「核兵器のない世界をめざして」

第4回 「『核抑止』は有効か? ―核の歴史をもう一度振り返る―」  
講師: 広瀬 訓 RECNA副センター長・教授  
日時: 2016年11月12日(土) 13:30～15:30  
場所: 国立長崎原爆死没者追悼祈念館

第5回 「広島に見る被爆体験と核兵器の危険性」  
講師: 水本 和美 広島市立大学広島平和研究所副所長  
日時: 2016年12月3日(土) 13:30～15:30  
場所: 国立長崎原爆死没者追悼祈念館

※いずれも受講料は無料、参加申し込みの必要はありません。

※ニューズレターを電子版でお受け取り御希望の方は、  
下記メールアドレスへ御一報くださいますようお願いいたします。



第5巻2号 2016年9月30日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター  
〒852-8521 長崎市文教町1-14  
Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165  
E-mail. recna\_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp  
http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/

印刷 株式会社インテックス

©2016長崎大学核兵器廃絶研究センター